佳作

彼女の存在

岡山県　岡山県立倉敷天城中学校三年　秋田　姫依

四歳で習字を始めて、今年で十一年目。中学三年生の今年は、今まで出品してきた数多くの書道展に出品することができる最後の年だ。有終の美を飾ってみせる、と気合十分な私だが、小学生の頃は、正直習字があまり好きではなかった。

毎年冬に開催される競書大会に備えて、文字の微調整や体調管理をしなければならない時期は、特に憂鬱だった。学校では病気を予防するためのマスク。今のようにマスクが当たり前ではなかった頃に、周りの友達が誰もつけていない中、マスクをつけるのが本当に嫌だった。学校から帰宅後は毎日欠かさず筆を持ち、何時間も練習をした。外からは友達の楽しそうに遊んでいる声が聞こえてくる中、私は筆を握り続けた。大好きな絵を描くことも我慢した。うまく書けず何度も挫けそうになり、泣きながら書くことも多かった。

小学四年生の頃になると、私は県外の書道展にも作品を出品するようになった。全国規模の書道展で入賞した時、友人を通して一通の手紙を受け取った。それは、遠く遠く離れた県外で習字を頑張っている同い年の女の子からの手紙だった。

「あなたの字が好きです。いつかどこかの書道展で必ず会えるように、私も頑張ります」。

それは、丁寧に書かれた手書きの手紙だった。今までに味わったことのない、心がぱっと温まるような嬉しい気持ちになった。

それから私は、彼女に会いたい一心で練習に励んだ。そうしているうちに、私の中で、嫌々練習していた習字の時間が、少しずつ苦痛ではなくなっていった。もっとうまくなりたい！字を書くことが好きだと本気で思ったのも、その時だった。

今でも、悔しくて涙を流すことは何度もある。うまくなろうとすればするほど字に迷いが出て、それに悩み、苦しい状況が続く。何時間も書いていると全身を支える手首の痛みも増してくる。しかし、これまでどんなに厳しい練習でも簡単に諦めようと思わなかったのは、紛れもなく周りの人たちや彼女の存在があったからだ。あの時私の気持ちを変えてくれた彼女は、今となっては私の目標であり誰よりも尊敬する存在だ。自分の字を好きだと言ってくれる人たちに囲まれて、私は自分に自信が持てるようになり、同時に自分の字を好きになれた。

今年もまた書道一色の夏休みが始まった。宿題や部活動に追われながらも、私は毎日欠かさず筆を持っている。文字の形、余白の美しさ、本文と名前のバランス、名前をどの位置に入れたら本文が生きるか。色々なことを考えながら筆を滑らせている。いつかどこかの書道展で必ず会おう、という約束を果たすために。